



働き方改革＝質の向上



子どもたちの
笑顔・元気のために

R 5 年度 第7号
津山教育事務所10月

「働き方改革」という言葉が学校現場にあふれ、各学校では、いろいろな工夫がなされています。先生方が無用な疲れから解放され、真に重要な仕事に集中できる環境が生まれ、生き生きと仕事に臨むことができる働き方が進んでいくことが望まれますが、一方で、「働き方改革」の名のもとに、必要なものまで削減・縮小されているのではないかと警鐘を鳴らす報道もあります。ある雑誌の一文です。「A I」を使ってテスト問題づくりや採点をさせることで、業務負担軽減を図るという記事が載っていた。架空の話として、ある医師が診断に時間がかかるので、全部A Iに任せました。患者は不安なので他の病院へ行きました。そのうち、この医師は自分がなんのために働いているのか分からなくなりました。「『働き方改革という錦の御旗』は本物ですか？」というものです。私たちの仕事は「子どもを成長させる」仕事です。中心になる部分は、私たちがしなければなりません。



【働き方改革の考え方】（最近読んだ本より）

忙しさが増すことの原因の一つは、ビジョン（方針・考え）と戦略（取組・計画）がしっかりせず、「どうやるか」ばかり議論することがあるのではないかと。また、単に仕事を減らすことだけでなく、「理想を実現する活動への参加に、人は生きる価値を感じる」ということも大切にしなければならない。仕事の効率化によって仕事の質が上がり、結果につながらなければならない。

・・・このような基本的な考え方をもって進めていく必要があるのではないのでしょうか。



- （１）どんな子どもを育てるのか、どのように育てるのかはっきりさせる。
- （２）本年度の重点化、焦点化を図る。
- （３）全職員で考えを共有する。
- （４）重点目標（育てたい子どもの姿）と全ての教育活動をつなげるよう体系化を図る。

子ども達を育てることで大切なことは、そう多くはありません。これに教育活動が繋がっていなければ、あれもこれもという「いらぬ多忙感」につながります。例えば、運動会（体育祭）においても、「どんな力を育てる行事なのか。そのためには、どんな活動や取組が必要か。」を明らかにし、それに沿った内容にしなければなりません。派手さ、見栄えは二の次です。そして、運動会の成果は「子どもが頑張った。よい運動会だった。」ではなく「ねらった力が伸びている。」でなければなりません。そして、成長を自覚させ、次の授業や活動につなげていかなければなりません。

- （５）全ての取組で児童・生徒の主体性・自主性を伸ばしていく（自走する方向で指導を進める）。

子ども達が主体的・自主的に学びに向かうことは子どもの成長では必ず育てていかなければいけない力です。さらに、このことが伸びていけば、私たちが、本当に行いたい「学び」に力を注ぐことができます。周辺の雑多なことに力を奪われることが、徒労感につながります。

- （６）検証では、「取り組みが伸ばそうとしている力にとって効果的か」という視点で行う。

- （７）「何の力を伸ばすのか不明確な取組」は削減対象である。

・・・上記のことは、A Pを確実に取組んでいくことにつながっています。また、「育てたい力」に注力すること、そのことが「働き方改革」になっていきます。